

教育映画祭  
優秀作品賞

日本産業映画・  
ビデオコンクール  
奨励賞

厚生省推薦  
文部省選定  
科学技術庁推奨



誕

その歓び

生

●企画—雪印乳業株式会社

●監修—雨森良彦 日本赤十字社医療センター  
第一産科部長

●協力—日本赤十字社医療センター

●監修のことは……………雨森良彦

「障子の棧がみえなくなつてはじめてお産が始まる」という恐ろしい文句がありました。一方では「案ずるより産むが易し」というようなぐさめとはげましの言葉もあります。

いずれにせよ、お産が女性にとって「大役」であることには間違いありません。

お産の苦しみをのりこえるには、近代医学の麻酔の力を借りるか、精神力というか目を開けて「障子の棧」をみつめながら自力でのりこえるかの2つだと思います。

麻酔鎮痛薬を借りない自然のヒューマンなお産を選択されるときは、あらかじめこのお産の仕組みをよく勉強し理解し、不安をとりのぞき「トレーニング」を受けておくことが大切です。そして気心の知れたコーチにいつもつきそってもらうことが大切です。このコーチは親しい助産婦さんでも良ければ、お母さんでも良ければ、お姉さんでも良いわけですが、なんといっても最愛の「夫」君にまさるものはありません。

ここに御紹介する産前教育用のフィルムは、これからお産を迎えようとする多くの妊婦さんの不安と恐怖をきつとりぞいてくれることでしょう。多くの後輩の安産のためにあえて感動的な御協力をいただいた3組の御夫婦に心から厚く御礼申し上げます。



●記録映画—28分・カラー

●価格—16ミリ/200,000円(消費税別)

全国視聴覚教育連盟事務局長

●推薦のことは……………関口 勇

数億の精子の中のたった1個と1個の卵子との出会いによって生成される一人の人間の「いのち」、なんと崇高な存在というべきではなからうか。

「おっ!ぎやあッ!」と声高々に張りあげる産声に、張り切った緊張の爆発をとめることはできない。「おめでとう!!」と思わず飛び

出す歓声こそ「人間誕生」の心からの歓びが籠められている。

受精から10ヶ月、一人の生命の誕生に至る迄の母親の労苦は並大抵ではない。わが身を削ってわが子を育てる。丈夫だった歯も子どもを産んでから、ぼろぼろになったということも聞く。わが子は正にわが身の分身、子の痛みはわが身の痛みと思うこの「親心」こそ、何にも替えがたい崇高な精神である。

こうした親心を、28分の映像に凝縮表現したのが、この映画である。「われ誕生せり」との宣言瞬間こそ、神秘的映像であり、親子一体感を深くする瞬間でもある。と同時に「親」たる意義を深く考えさせられる瞬間でもあるのだ。そして崇高な「性」について、小・中・高校そして若者時代と積みあげてきた認識を結実させる時でもある。

性の神秘さの理解によってこそ、人間の尊厳さを理會することができる。そうした方向でこの映画が多くの人々に見ていただけるよう希望してやまない。

●製作—株式会社 桜映画社 〒160 東京都新宿区西新宿 1-22-1 スタダードビル  
TEL 03(342)5768 FAX 03(346)1844

●配給





## ●あらすじ

初診の飯田さんはやはり妊娠だった。妊娠している事に気付かないで胃薬を飲んだのが気がかりだった。これからは薬類を飲まずにのりこえるようにとの、先生の御注意だった。妊娠は、1ヶ月に1個排出される卵子と何億分の1の精子とが結合し、子宮に着床する所から始まる。ヒトとしての始どの器官の形が作られる3ヶ月までが、特に大事な時期である。この頃までは胎盤も完成しないので流産の心配やつわりに悩まされてうっとうしい。夫は、気が紛れるようにと、休日には外に連れ出すように心がけてくれる。4ヶ月の定期検診では初めてドブラーで胎児の心音を聴き、安心すると共に生命の存在を実感したのである。

4ヶ月を過ぎると胎盤も完成し、流産の心配は少なくなり、胎児は急速に成長する。草加さんは大きくなったおなかを抱え、夏の暑さと通勤ラッシュが身にこたえるようになってきた。夏の職場ではクーラーによる冷え過ぎを特に気をつけたい。同僚たちも何かと気を配ってくれている。だが、8ヶ月の定期検診で、軽い妊娠中毒症といわれてしまった。中毒症は胎盤の病気で、ひどくなると胎児の生命をおびやかす。しばらく休みをとり、無事に回復する。

草加さんが母親学級で知り合った古園夫妻は、夫立ち会い分娩をめざしている。近頃は、分娩に立ち会わなくても、母親学級に出席する夫たちが多くなってきた。夫もお産のメカニズムを知るうちに自覚が高まり、家事など何かと手伝ってくれるようになる。予定日が近づき、出産に向けて生活と心の準備をする2組の夫婦——。そして、草加さんは男児を、古園さんは女児を見事に産む。感激のあまり涙ぐむ古園さんの夫の姿は、出産が人生の大きなドラマである事を改めて実感させてくれた。

## ●製作にあたって

この映画は、自然分娩へ向けての日常の心がまえを、妊娠の初期・中期・後期にある実在の妊婦3人の生活を通して具体的に描いています。妊娠・出産のメカニズムは、いつの世も変わりませんが、大きく変わったのは、夫たちの出産への参加意識といえるでしょう。もはや、出産は女だけのものではない、という考えが普遍化しつつあることを、映画は実証しています。妊婦だけではなく、これから親になる若い人々にも、ぜひみていただきたい作品です。

## [利用の手引]

映画鑑賞後皆で作業をしたり話し合って行動していくことに努めよう。

- ①妊娠から出産迄の胎児の成長とそれぞれの時期における注意事項を対照表にまとめ、内容を確認しよう。
- ②数億の精子のたった1個と卵子の出会い、この神秘、一人のいのちの誕生の尊厳さを理會する。
- ③妊娠3ヶ月は大事な時期、その理由は？つわりについての注意は？
- ④4ヶ月の定期検診で「心音」が聴こえる、この時の気持はどうだったろう？
- ⑤仕事をもつ人の注意、特に妊娠中毒症の予防はどうするか。「未熟児」について心配りは？
- ⑥「母親学級」での学習の日常生活・出産準備への活用をどうすすめるか。
- ⑦臨月の状況、胎動に対する心の準備は？
- ⑧出産を間近かにして生活の仕方をどう整える？
- ⑨草加・古園さんの例から何を学ぶか。
- ⑩人間一人を生み出す女性の力のすばらしさを自覚し、今後の子育て、生活への自信を持つ。
- ⑪妊娠から出産までの母親の労苦に対してどう思うか。自己の存在を思いうかべて。
- ⑫「人間の尊厳」について考えよう。

[用途] 母親学級、明日の親の学級等の指導教材  
産婦人科、小児科医院などの研修用  
高校看護科、准看護学校の学習教材  
中・高校における性教育の発展教材  
婦人会・青年教室・PTA集会



## ●スタッフ

製作＝村山和雄＋村山英世  
脚本・演出＝藤原智子  
撮影＝植松永吉  
音楽＝広瀬量平  
編集＝吉田栄子  
照明＝水村富雄  
解説＝川久保潔

妊娠7ヶ月目の胎児。